



# イノベーションアワード受賞 「SHOSABI」

株式会社SHOSABI 代表取締役 CEO **かみやま さちこ**  
**神山 祥子**



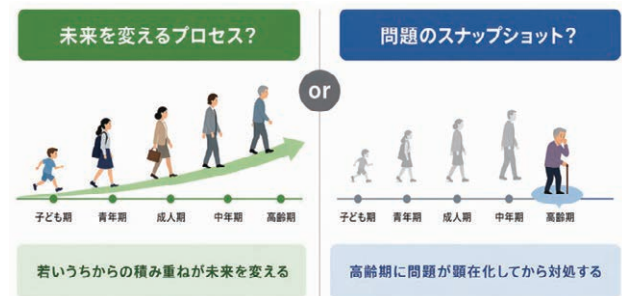
## 1. CES2026で注目された「Physical AI」 と「Healthy Longevity」 — AIは“身体理解”へ向かい始めている

SHOSABIは、CES Innovation Awards 2026 Sports & Fitnessカテゴリーを受賞した<sup>[1]</sup>、日本発のHuman Physical AIである。リアル3Dセンシング技術と独自のAI-poweredシステムを組み合わせ、人間の動きをリアルタイムに解析し、更に動作再学習まで支援する、特許取得済みの独自「Movement Intelligence（動作知能）」に取り組んでいる。現在は、英国や中東地域の先進的なフィットネスクラブやクリニックなどで有償導入が進んでおり、「長く健康に動ける身体」を支える新しい身体理解技術として展開している（図1）。

CES2026では、そうしたSHOSABIの方向性とも重なるように、「Physical AI」や「Healthy Longevity（健康長寿）」への関心が大きく高まっていた。

生成AIが注目される一方で、会場ではAIがデジタル情報だけでなく現実空間や人間の身体を理解し始めていることを示す展示が増えていた。Physical AIとは、AIがデジタル情報だけではなく、現実空間や身体と相互作用しながら理解・判断する方向性を指す。従来のテキストや画像中心の処理とは異なり、センサーやリアルタイムデータを通じて現実環境を理解対象とする点が特徴である。

ヘルステック領域においてHealthy Longevity（健康長寿）は、若年層から高齢者までを含めた長期的な身体管理の概念として関心が高まっており、日本で語られることの多い高齢期支援中心の健康長寿との違いも感じられた（図2）。



■図2. 健康長寿に対する予防型アプローチと対症型アプローチの違い

CES会場では、歩行の質や姿勢、リハビリなど、日常的な身体機能（daily mobility）に関連する展示も増えていた。単なる運動量や筋力だけではなく、筋骨格系（MSK）の維持や予防的な健康管理へつなげる身体理解技術への関心の高まりも感じられた。

こうした流れは、既に先進的なフィットネスクラブやクリニックでも表れ始めている。英Financial Timesでは、ロ

## CES 2026 SHOSABI



■図1. CES2026におけるSHOSABI展示・受賞関連の様子

ンドンの高級フィットネスクラブ Third Spaceを舞台に、「長く健康に動ける身体」をテーマとした特集記事を掲載した<sup>[2]</sup>。Third Spaceでは、筋力や持久力だけでなく、身体機能や動きそのものを重視した評価が行われており、そのプログラムとしてSHOSABIが導入されている。

CES2026では、「長く健康に動ける身体」を支える身体理解技術が、ヘルスケアやフィットネス領域における新しい潮流として存在感を示していた。

## 2. なぜ今、「動きの質 (Movement Quality)」が重要なのか — 健康長寿時代に求められる身体理解

人間の身体には、日常動作からスポーツまで共通する「基礎的な身体機能」が存在している。

歩く、立つ、座る、支える、しゃがむ、跳ぶといった動作は一見異なるが、姿勢制御、バランス、コーディネーション、重心移動など、多数の共通する身体機能によって成立している。例えば、スクワット動作は、単なるトレーニング種目ではなく、立つ、座る、支えるといった日常動作に共通する基礎機能を反映している。

近年では、長時間座位、スマートフォン利用、運動不足など、現代的ライフスタイルの変化によって、「身体を適切に認識・制御する能力」そのものが低下しつつある。人間は代償能力が高いため、多少身体機能低下があっても、日常生活を続けることができる。しかし、その代償動作の蓄積が、痛み、不調、慢性的な運動器トラブル、スポーツ障害、フレイルや転倒リスクなど、世代を超えた多くの問題につながる可能性がある。これらは、一見別々の問題に見えるが、その背景には、「人間がどのように身体を使っているか」という共通した身体機能の問題が存在している。

特に海外では、Healthy Longevityを「高齢期だけの問題」としてではなく、一人の人間の身体機能が長期的に変化していくプロセスとして捉える考え方が広がり始めている。そのため、単なる運動量や筋力だけではなく、「どのように動いているか」を早い年代から理解・維持することへの関心が高まっている。

SHOSABIでは、その共通基盤の1つが「Movement Quality (動きの質)」であると考えている。

Movement Qualityは、今後の健康管理や身体機能理解において、重要性が高まっていく概念の1つである。

## 3. Human Physical AI 人間の動きを“理解”する技術

### 3.1 構造化されてこなかった「動きの質」

人間の動きは、これまで「感覚」や「経験」として扱われることが多かった。例えば、「姿勢が悪い」「左右差がある」「身体がうまく使えていない」といった表現は存在しても、それらを定量的かつ構造的に理解することは容易ではなかった。また、人間の動きは単純な筋力や関節可動域だけでは説明できず、言語化が難しい暗黙知でもある。

姿勢制御、バランス、コーディネーション、重心移動、タイミングなど、多数の要素がリアルタイムに連動しており、歩行、立ち上がり、スクワット、片脚支持などの日常動作の中にも、こうした複雑な身体知が含まれている。その背景には、Biomechanics (生体力学) やMotor Learning Theory (運動学習理論) など、人間の動きに関する知見が存在している。

SHOSABIが取り組んでいるのは、単なる動作解析ではない。人間が無意識に行っている身体制御やMovement Quality (動きの質) を、理解可能な知識として構造化することである。

### 3.2 動作設計とMovement Intelligence

SHOSABIは、人間の動作そのものではなく、その動作を通して表れる身体制御の関係性を理解対象としている。歩行やスクワットのような日常動作には、身体を支えるための基礎的な身体制御や、身体各部の関係性が表れる。一方で、片脚支持やジャンプ動作では、より高度な安定性や協調性、瞬間的な力発揮など、スポーツ動作にもつながる運動制御特性が表れる。各動作は、単なる運動ではなく、「動ける身体」を成立させている運動制御状態を理解するための身体情報として捉えられる。重要なのは、多数の動作を計測することではなく、「どの動作で、どの身体関係性を観察するか」という動作設計である。

こうした動作の中に表れる姿勢制御やコーディネーションの関係性は、“意味”を持つ身体情報として解釈され、Movement Intelligenceとして構造化される。SHOSABIでは、こうした状態をBrain-Body Coordination (脳と身体の協調状態) として捉えている。人間の動きは、筋力や関節可動域だけで成立しているわけではない。それらをどのように協調・制御しているかという運動制御能力そのものが、Movement Qualityを支える重要な要素となっている。

人間の動作を単に計測するのではなく、その背景に存在



する運動制御そのものを理解対象とし、その理解をリアルタイムのガイダンスへ接続することで、新しい身体学習の可能性に挑戦している。

### 3.3 3Dセンシング × AI × Structured Logic

SHOSABIは、この身体理解をリアルタイムに実現するため、TOF (Time of Flight) センサーを用いたリアル3Dセンシングを採用している。TOFセンサーは、空間認識が求められるロボティクスや産業領域などでも活用されている技術であり、人間の動きを三次元的に捉えることが可能である。

しかし、SHOSABIの本質は、単に大量の3Dデータを取得することではない。取得された動作データを、構造化された身体理解ロジックに基づいて解釈することにある。リアル3Dセンシングによって取得された動作データを、独自のAI-poweredシステムによってリアルタイム解析している。

ただし、その本質はAI単独のブラックボックス判定ではない。生成AIを中心としたブラックボックス型の推論技術が急速に進化しているが、SHOSABIは、BiomechanicsやBrain-Body Coordinationといった身体の本質的構造を踏まえて、長年蓄積してきた身体理解ロジックとAIを統合することで、人間のMovement Qualityを多角的に理解することを目指している。

さらに、背景となるStructured Logic (構造化判断ロジック) については、機械学習を通じて継続的にブラッシュアップを行っており、より実際の人間の動きに適した身体理解へ進化させている。

現在は、リアル3Dセンサー、PC、モニターを組み合わせた構成で提供されているが、その本質は、人間の動作を理解する「Movement Intelligence Engine」にある。そのためSHOSABIは、単なるフィットネス機器ではなく、「Human Physical AI」として位置付けられる。また、この技術背景には、東京大学との共同研究<sup>[3]</sup>に加え、三菱ケミカルグループにおける長年の研究開発やヘルスケア領域での知見蓄積があり、複数の特許を単独保有している。

## 4. 人は「理解」だけでは変わらない — SHOSABIのMovement Relearning技術

SHOSABIが重視するのは「評価」だけではない。人が自分の身体を理解し、動きを再学習できて初めて、変化につながると考えている。従来のフィットネス機器では運動量の増加を目的化し、身体分析システムは、数値やフォーム分析結果の提示が目的化しやすかった。しかし実際には、

「理解した」だけでは、人の動きは簡単には変わらない。そのためSHOSABIは、「Movement Relearning (動作再学習)」という考え方を重視している。単なる筋力向上や可動域改善ではなく、「どう動いているか」を理解しながら、動作そのものを再学習していく考え方である (図3)。利用者自身が、自分の身体状態に気付き、自ら身体を調整・管理できる状態、すなわち「Physical Self-Management」という考え方である。

そのためリアルタイムフィードバックや、認知特性に応じたガイダンス設計を重視している。特に重要なのが、その場で理解できる「0秒フィードバック」と、認知特性を利用した360度の角度から自分の動きを確認できるUI/UXである。単純なUI/UXではなく、背後に信頼性のあるロジックがあり、三菱ケミカルグループ時代からのヘルスケア領域での行動変容研究や運用知見データが活かされている。

SHOSABIの取組みは、単なるフィットネスの効率化ではなく、人が自分自身の身体を理解し、長く健康に動き続けるための「身体理解基盤」を構築することである。

## 5. SHOSABIの実社会実装 — 身体理解は既に始まっている

SHOSABI Inc. の最初のプロダクトは、Movement Qualityを評価するAssessment Toolである。特徴は、単なる評価だけでなく、評価と同時に動作再学習 (Movement Relearning) を支援する点にある。従来の「測定して終わる」アセスメントとは異なり、「理解」と「再学習」が連続的に起こることが特徴である。

Assessmentでは、姿勢やバランス、動作パターンなどを



■ 図3. リアルタイムフィードバックを受けながら自身の動きを確認する様子

リアルタイムに解析し、その場でフィードバックを行う。利用者は、自身では気づきにくい身体の偏りや動き方の特徴を確認しながら、自分自身の身体への理解を深めていく(図3)。

既に、英国や中東地域<sup>[4]</sup>のプレステージフィットネスクラブ、パーソナルトレーニング施設、先端糖尿病クリニックなどで有償導入が進んでいる。導入現場では、その施設のニーズに応じて、体組成やVO2Maxなど他の身体データと組み合わせながら、身体状態をより多面的に理解する取組みも始まっている。例えば、英国ロンドンのThird Spaceでは、「Longevity Test」の身体機能評価プログラムの一環として活用されている<sup>[5]</sup>(図4)。

実際の運用では、身体チェック後に来館頻度の向上や、パーソナルトレーニング開始率の上昇なども確認されている。これは、「自分自身の身体に気付くこと」が、健康行動そのものの変化につながる可能性を示している。

実際の導入現場では、利用者や専門職側にも様々な変化が見え始めている。ジム利用者からは、「できていると思っていた動きが、実際にはうまくできていなかった」「逆に苦手だと思っていた動きが意外とできていて、自分の身体に興味を持つようになった」といった声も聞かれる。また、パーソナルトレーナーからは、「これまで言葉だけでは伝わりにくかった身体の使い方が、客観的な情報によって伝わりやすくなった」「指導内容への理解度が高まり、教える側としての手応えも変わった」といった反応も見られている。更

に理学療法士からは、「運動に苦手意識を持つ人にとっても、身体を理解する入口として重要な役割を持つ可能性がある」といった声も挙がっている。

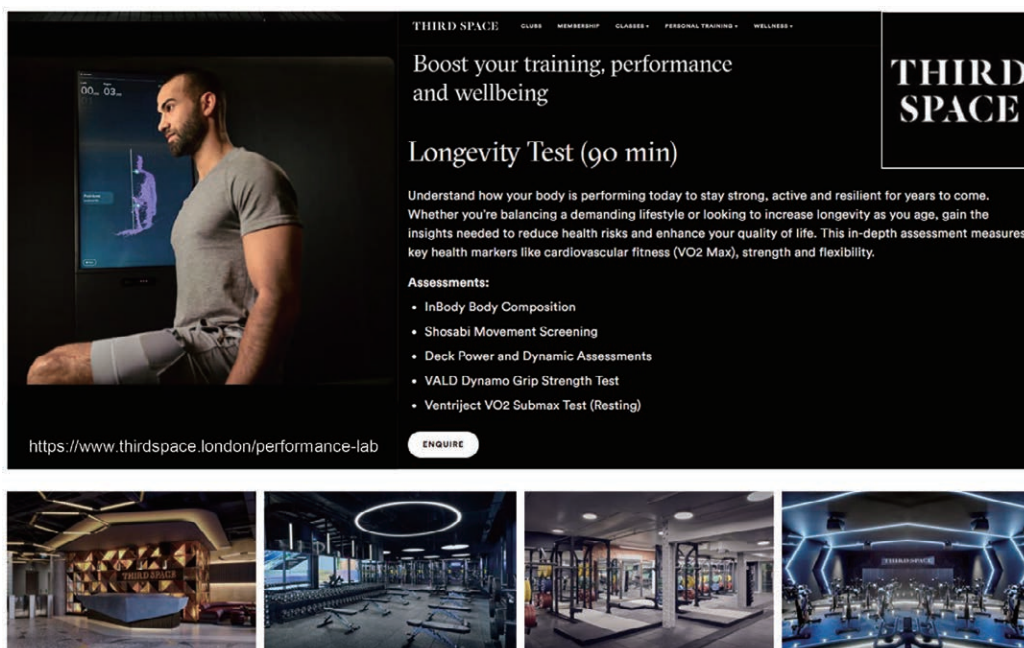
SHOSABIの導入現場では、フィットネスクラブやクリニックの役割そのものにも変化が見え始めている。従来の「運動する場所」や「治療する場所」から、身体状態を理解し、自ら調整・管理していくための場へと役割が広がり始めている。SHOSABIは、そのための“身体理解インターフェース”として、実社会での導入を進めている。

## 6. CES2026で見えたHuman Physical AIの未来

### — 身体理解は新しいインフラになるのか

CES会場では、運動機能評価システム、運動量トラッキング、ウェルネスアプリなど、多数のヘルステック関連展示が行われていた。

その中でSHOSABIのブースには、多国籍かつ多様なバックグラウンドを持つ来場者が訪れ、体験価値の高さに強い関心が集まった。来場者からは、「これまで体験したことがない」「単なる評価機器ではなく、自分の身体そのものを理解できる」といった声が寄せられ、「50年以上生きてきて、初めて自分の身体の偏りや姿勢を理解できた」「自分の動きがその場で理解できるのが面白い」という感想も聞かれた。また、“Human Physical AI”や“Movement



■ 図4. 英国Third Spaceで提供されている「Longevity Test」と施設内の様子



Intelligence”という新しい領域として関心を持つ企業や投資関係者も多く、複数のグローバル企業との協業検討が進んでいる。CES 2026では、AIが「知能」だけではなく、「身体理解」へ向かい始めている流れを強く感じた。

現在のSHOSABIは、リアル3Dセンサー（TOFセンサー）、PC、モニターを組み合わせた構成で提供されているが、その本質はハードウェアではなく、人間の身体を理解する「Movement Intelligence Engine」にある。今後、ウェアラブルデバイス、スマートグラス、空間コンピューティングなど、インタフェースが変化していく中で、「人間の身体を理解する」という考え方そのものを、様々な環境へ実装できると考えている。

AIが人間の“知能”だけではなく、“身体”そのものを理解し始めている現在、「人間が自分自身の身体を理解する」という行為そのものが、新しいヘルスケアの基盤へ変化し始めている。SHOSABIは、“Making Healthy Actions Visible”を通じて、医療、フィットネス、スポーツ、健康

経営といった領域を横断しながら、人が自分に必要な身体行動を理解し、継続できる社会の実現に挑戦している（図5）。

#### 参考文献

- [1] CES Innovation Awards 2026, Sports & Fitness Category  
<https://www.ces.tech/ces-innovation-awards/2026/shosabi-assessment/>
- [2] Financial Times, 2025 “Inside the Longevity Club”  
<https://www.ft.com/content/3f68a9ce-45f3-4923-8443-cdab0620d749>
- [3] 東京大学出版会『ジェロテクノロジー』第12章「ICTと健康支援」
- [4] JETRO, 2025,「所作の美」が中東フィットネス・医療に広がる（UAE）  
<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2025/55d860c780069ecd.html>
- [5] Third Space London – Performance Lab  
<https://www.thirdspace.london/performance-lab>



■ 図5. SHOSABI “Making Healthy Actions Visible”